はず、之を擔いて江湖を遍歴するのである。此は是主客を看るのである。

或は又學人在つて、本分の田地に安住して居ながら、問處に格別の用事はなけれども師家を驗みんが爲めに、恰も無眼子の如くに裝ひ、師家の面前に出頭して「如何是祖師西來意」とか、或は又「如何是佛法大意」とか、一問を呈すれば。師家便ち學者の一問は句裏に機を呈し來ると云ふことを知つて、學者を把定して一掌を與へ。或は一棒一喝を行じて萬丈の坑子裏に拋向するのである。則ち學者の方から師家を把へて己が窠窟に取つて箝めんとする所を、師家の方より機先を制して、却つて彼の學者を奈梨へ直逆樣に突落すのである。眞の善知識であるならば、斯の如くに無くてはならぬ。然るに學者も明眼であるから、師家に突落さして居ながら、軈

把得拋向坑裏



て居直りて云く、

世間宗師家と稱する者は麻の如く粟の如しと雖も皆是相似の善知識のみである然るに老漢阿方ばかりは眞の大善知識でありますと

師家を托上して挨拶せられた、實に言中に響がある。師家は亦直に學者の機を鑑て

咄此の馬鹿野郎己等が分際で物の好いも惡いも分つてたまるものか分らなければ分らないやうに口を噤んで默つて居るがよいと

却て學者を抑下せられた。是師學共に能く好惡を知りたる知音同士である。學者師家に罵られて

誠に最前からの御無禮の段は平に御容赦を蒙りますと

學人云大好善知識

咄哉不識好惡

此喚作主看主

云つて、空とぼし風を爲して禮拜した。是等の相見を喚んで主主を看ると云ふのである。

茲に又一人の學者が在つて、文字葛藤の枷を披し、鎖を帶びて、師家の面前に出で來り、佛語如何、祖語又如何と問へば。師家も亦無眼子であるからして

朝夕怠たらず看經看教などして佛を禮し祖を禮し常に後生を願つて淨土に往生を遂げられよ

などゝ、是は枷鎖の上に枷鎖を入れたも同事である。孰れも無眼子の出合であるから、學者一重の枷鎖を入れられて繫縛せられしことを覺らずして、却て之を殊勝に思ひ、さながら生佛にても逢ふたる如く歡喜して已まない。斯樣な無眼子共の出合は、何れが師家であるやら、何れが學者であるやら、賓主の分ちが知れない、此の如き輩は一生主人公となる

呼爲客看客

こと能はずして、師學共に客人で果すのである。之を呼で客客を看ると云ふのである。諸大德、今此の方が斯の如く諸人に擧示する所は、更に別の用事ではない。汝等諸人が賓主の邪正を辨別することが出來ないに依て、若し斯樣にもして示したならば、彼は邪魔外道の種族である、此は眞正見解の善知識であると、其の邪正を分明に辨別し、選擇する所の方便にもなるのであらうかと思つて、眉毛を惜まず、是の如く四賓主の次第を立てゝ說示したのである。故に能く此の四賓主の話を鍛錬して各自己の眼鏡と爲し、師家の邪正を辨別して、惡知識の窠窟に墮在することなく、又邪魔の種族とならぬやうに用心するがよい。總て禪僧は佛魔を辨じ、邪正を辨ずるのが肝要である。是は本分現成の上ばかりでは知れない、機關を用ひる上に於て知ることが出來る。機關は向

道流情大寂難法幽玄解得可可地

上であるから、昔より明眼の衲僧多しと雖も、能く之を受用した者は稀である。

道流、此の方が最早年久しく此の道の爲めに誠實の志ある學者を求むれども、誠實の志ある學者は實に得難い。然るに佛法の道理は實に幽玄にして測難い。幽玄にして測難しと雖も、若し誠實の學者在つて此の道理を知らんと欲すれば、實に何より最易く知ることが出來る。故に古人も「至道無難」と云つて居る。只學者に誠實の志がなくて、揀擇の念深きが爲めに、佛法深密の處に徹底することが出來ない。斯の如く山僧が終日眉毛を惜まず學者の爲めに說破すれども、學者總に意に在かないのは實に慨かはしき次第である。其の諸人の爲めに知らせたく思ふ所の者は、遠くかけ離れて居る者でもあるとか、汝諸人が十二時中千徧も萬徧も脚底に

千徧萬徧脚底踏過黑沒煖地

踏過しつゝある。然るに其を知らずに大地黑漫々たる境界で居るのは愚の至である。其脚底に踏過しつゝある者は如何なる者であるかと云へば、此の者は更に是と云ふ形はないが、孤明歷々として藏すことも出來ない。斯く迄漏逗すれども、學人信不及にして便ち名字言句の上に向つて佛法を求め、邪解を逞うするのは情ない。若い時の苦勞は買ふてもせよと云ふこともあるが、最早年半百に登として居ながら、深い眠から醒めないで、此の四大假和合の色身を何時までも怙みに思ひ、大きな複子を背負ひて諸方を遍歷するのを見れば、少しも活氣を帶びた所はない、恰も死屍の步むが似くである。實に氣の毒千萬である。恁麼にして假令數萬卷の書物を讀破りたとした所で、佛祖不傳の妙道は文字言句の上に有るものではない。是等の學者を物に譬へて云つて見

年登半百祇管傍家負死屍行

れば、彼の本箱の内を住家とし、書籍を食として居る蠹蟲と同事である。又世間の學問にした所が、其本義とする所は人の人たる道を修むるのが肝要である。然るに世間多くの學者は素行が修らない、甚しきに至つては禽獸にも劣る破廉恥罪を犯して恬として恥ぢない者も在る。是等の者を學者と云へるなら、彼の蠹蟲先生は大學者である。聖人の意と云ふ者は書物の中に有るものではない。孔子曰く「弟子入ては則ち孝出ては則ち弟謹て信汎く衆を愛し仁に親しむ行ひ餘力有れば則ち以いて文を學べ」と、子夏曰く「賢を賢として色を易んず父母に事へて能く其の身を致す朋友と交り言うて信有らば未だ學ばずと曰ふと雖も吾は必ず之を學びたりと謂はん」と。假令目に一丁字なくとも、行脚須らく行脚の眼を具す可しだ、行脚の眼を具せずして徒に諸方を遍歴するのは、盲目の廻國と同事である。斯くして一生を果さば、必ず何時か閻王の前に於て生存中徒に草鞋を踏破せし故、其の代金を拂へと云つて强請せらるゝことがあるに相違ない。其の時に當つて必ず狼狽へなければならない。

大德山僧說向外無法學人不會便卽向裏作解

諸大德、山僧が外に向つて法なしと說けば、學人會せずして便ち內に向つて邪解を起し、動中を厭ひ靜處を求め、見ぬが佛である、聞かぬが佛であると云つて面壁して、舌を以て上齶を拄へ、湛然として身動もせず、默照枯坐して是が至極の道人である、是が祖宗門下の佛法であるなどゝ云つて居る。大に錯つて居る。諸人、不動清淨の境界は勿論好處ではあるが、若し其の不動清淨の境を是と認めて、其處に執著したならば、其れは卻て他の無明を認めて主人公と思つて居る

古人云湛々黑暗深坑實可怖畏

動者是風大不動者是地大

のである。默照禪は大に錯て居ると、此の方が今更云ふばかりでもなく、古人も「湛々たる黑暗の深坑實に怖畏す可し」と云はれて居るが、即ち此處の事である。此の黑暗の深坑は黑山の鬼窟とも云つて、死人坑である。此處に一度墮落するときは再出つることは出來ない。實に怖る可き處である。各用心す可きである。然し斯く湛然として動ぜざる處を取て祖門の佛法と爲すは邪解であると云へば、諸人、又動處に向つて佛道を求むるであらうが、若し他の動ずる者を是と認めば、風の爲めに草木の動搖するのも是佛道であらうか。上に也屢述ぶるが如く、此の五尺の色身は地水火風の四大性が假りに因緣和合して出來た者であるから、動きもすれば、動かないこともある。此の身の動くのは風大の所爲で、此の身が動かずに居るのは地大の所爲である。然し動と不動は俱

大德動與不動是二種境還是無依道人用動用不動

に自の本性ではない、皆是虛妄不實の者である。人々具足の這箇無依の道人は、動不動の處に在つて、而も動不動に預かる者でない。然るに諸人、若し動處に向つて他を捉へんとせば、他は忽ち不動處に向つて獨立し、若し不動處に向つて他を捉へんとせば、他は忽ち動處に向つて獨立し、如何に之を捉へんとした所で捉へることは出來ない。今此の有樣を物に譬へて云つて見れば、恰も水中に潛む魚が波を衝いて活潑々地に彼方へ向き、此方へ向き、躍つたり、跳ねたり、自由自在なるが如くである。諸大德、動と云ひ、不動と云ふは、前に云ふ如く、風大と地大との二種の境である。這箇無依の道人は、此の二種の境惑を受くる者ではない、還て是の這箇無依の道人が坐ぜんと要せば則ち坐し、行かんと要せば則ち行き、動を用ひ、不動を用ひ、自由自在に二種の境を使つて居るの

如諸方學人來山僧此間作三種根器

てある。今此の臨濟も動不動を用ひて自由三味である。彼の世間の邪師の如く鬼窟裏に向つて活計を營むが如きことは少しもない。其故諸方の學人が出て來るときは、山僧は先づ大體學者の根器を三種に區別して接得するのである、動不動何れか一方に落在して居たなら、學者の根器を三種に區別して自由に接得することは出來ない。若し學人の中に於て、中等以下の根器を具したる者が出て來れば、我便ち其の學者の問ひ將ち來る所の境、及び一切萬境悉く奪つて、只本分を打成一片に提撕するやうに示す。或は又中等以上の根器を具したる學者が出て來て、何事か問ひ將ち來れば、我便ち境、法俱に奪つて一塵一法をも殘さず本來無一物の處を以て直指する。若し又上々根器の怜悧俊發なる學者が出て來れば、我れ便ち境、法、人俱に奪はずして、便ち目前の境を

學人著力處不通風石火電光卽過了也

捉へて日用應緣の處、著衣喫飯の上を以て接得する。若し又上々根器以上、超宗越格底の見解を具したるもの在つて出て來れば、此の方の處に於ては便ち全體作用して少も根器の詮索はしない。此の全體作用底は各自骨折て參究するがよい。一大事因緣と云ふも即ち此の事である。三世の諸佛、歷代の祖師も、此の受用を第一とせられた。全體作用すれば自由自在の分がある。併し其の人にあらざれば彷彿することは出來ない。斯く云ふときは、學人亦此の處に眼を著けて精力を費すであらうが、這裏に到つては更に其の消息は通じない。此の處は元來沒蹤迹で石火電光も及び難い處である。學者若し僅に眼を動せば即ち千里萬里天地懸隔するのである。是の如く這箇は眼に見ることは出來ないと云へば、學人又心念を起して情量計較を逞うするであらうが、心を擬

大德汝擔鉢
嚢屎擔子傍
家走求佛求
法

すれば即ち差ひ、念を動すれば即ち乖く。若し人有つて馳求の心を歇得し、念慮を忘却し回光返照する時は、這箇元來目前を離れず歷々として在ることを解することが出來る。至近にして見る可からざる者は眉目である。至親にして知る可からざる者は心性である。眉目は見る可からずと雖も鏡に臨むときは則ち之を見ることが出來る。心性は固に知る可からずと雖も徹悟するときは則ち之を知ることが出來る。然るに諸人、種々のガラクタ道具を文庫や、複子に詰込んで、其の上此の五尺の革嚢に彼の邪師の嘔吐粕を盛り、さも重もたげに擔ぎ去つて諸方を遍歷し、文字言句の上に向つて佛を求め、法を求めんとするのは、恰も鏡を離れて自己の眉目を見んと欲するが如くである。汝還て即今與麼に馳求する底の者を識るや、此の者は實に活潑々地にして即今目

靈音屬耳若
人不信徒勞
百年

前に在るかとすれば忽然として後に回り、左に在るかと思へば忽ち右に回り、右に在ると思へば忽ち左に回り、東西南北、四維上下、在々處々、頭々物々の上を自由自在に遊戯して、一切其正路も定らない、亦取認めて此處が根本であると云ふ處もない。而して此者は擁して捉へんとすれども聚りもしない、亦撥して除かんとすれども散じもしない、求著すれば轉た遠く、求めざれば還て目前に在る、是什麼物であるか。即今門前雀がチウ〳〵と鳴いて居る、其れ又烏がカア〳〵と、靈音耳に屬す、浮かりとして居るまいぞ。這箇目前を離れざる底の者は到處滿々ちて居る、滿眼滿耳回避する處はない。長沙の岑大蟲は「滿眼本非色、滿耳本非聲、文殊常觸目、觀音塞耳根」と頌じられた。磯の松風、浪の音、夕暮の鐘の響、鳥の啼く音等耳に落つると否や夫々聞分ける。鐘は能く響を傳ふ

れど、其の響は鐘にあるのでもない、松風の音も亦同事、其の木を切割つて見た所で音は見えない、實に靈妙不可思議なる者である。古德の中には雪夜竹の音を聞いて悟つた人もある。又蛙の鳴く聲を聞いて悟つた人もある。又鐘聲を聞いて悟道した人もある。油斷さへして居なければ、時々刻々悟る場合が在るのである。若し人信ぜずして外に向つて之を求めば、徒に苦勞するのみで、空しく一生を過すであらう。道流、這箇無依の道人は一刹那の間に華藏世界に入り、毘盧遮那國土に入り、解脫國土に入り、神通國土に入り、淸淨國土に入り、法界に入り、穢に入り、淨に入り、凡に入り、聖に入り、餓鬼畜生に入り、更に嫌ふ處はない、入らんと欲する處に入り、出でんと欲する處に出て、「大千沙界內一箇自由身」である。是の如く處々に出沒する者であれば、何處か其の蹤迹があるか

唯有空名

と尋求むれども沒蹤迹である。沒蹤迹である故に、生ぢやの、死ぢやのと云ふこともない。此の生死に預らざる底の者は畢竟如何なる者であるかと、一念回光返照すれば、唯空名のみ有つて、更に其の實體はない、幻化空華の如き者である。幻化空華の如き者であるからして、把捉することも出來ない。把捉することが出來ないからして、勿論得失是非の沙汰はない。然るに世間の學者、僧俗共に此の幻化空華の裡に於て、朝より暮に至る迄、是を論し、非を論し、得失を論し、此の一道の神光を昧却して、空しく一生を過しつゝ在るのは、惜みても尙餘りある。願くは其のやうな役にも立たぬ事共は、さらりと西の海に拋却して、只這箇のみを胷間に掛在して、一刻片時も愼んで雜用心することのないやうにせなければならん。

佛法的々相承

道流、山僧が佛法的々相承して麻谷和尚、丹霞和尚、道一和尚、廬山和尚、石鞏和尚の此の五大老と一路に行じて、其の見地の程も更に麤細淺深高下等はない。此の五大老は祖師の中にても就中明眼の宗匠で在つて、今其の嗣法の者は天下に流布徧滿して居る。然るに大善知識の上は凡眼を以て窺ふことが出來ないから、皆罵詈讒謗して信得する者もないのは實に是非もなき次第である。

道一和尚

馬祖道一禪師は、漢州什邡縣の人で、姓は馬氏、虎の視るが如くに視、牛の行くが如くに行き、舌を引けば鼻を過ぐ、而して足下に二輪の文があつて容貌が頗る普通と異つて居たと云ふ。法を南岳の讓和尚に得て、後に蜀の國に歸て來た。所が鄉人一同非常に馬祖の歸鄉を歡迎した。只一人溪邊の婆子が之を見て「將に謂へり何の奇特が有ると元と是馬尿箕家の小子なり」と云ふた、師之を聞いて遂に曰く「勸君莫還鄉、還鄉道不成、溪邊老婆子喚我舊時名」と、再び江西に返つて法幢を盛にせられた。此の馬祖道一和尚の用處の如きは、純一無雜で少も枝葉には涉らない。今其の一二の例を擧ぐれば、龐居士參する次で、問ふて云く「萬法と侶たらざる者是什麼人ぞ」、師云く「汝が一口に西江水を吸盡せんとを待つて即ち汝に向つて道はん」と、又百丈再び馬祖に參ず、侍立する次で、祖目を以て禪床角頭の拂子を視る、祖來るを見て拂子を拈じて竪起す、丈云く「此の用に即するか此の用を離するか」、祖拂子を舊處に掛く、侍立すること片時、祖曰く「汝已後兩片皮を鼓して如何が人の爲めにす」、丈拂子を取つて竪起す、祖云く「此の用に即するか此の用を離するか」、丈拂子を舊處に掛く、祖便ち威を振つて一喝す」、學者を接すると多く是の如く

である。故に馬祖の會下には常に三百五百の大衆が居られたなれど、眞に馬祖の意を知つて居た者がなかつたと云ふ。

**廬山尙和**

廬山歸宗寺の智常禪師は、馬祖の法嗣である。此の和尙の如きは、眞正の見解を能く受用せられて、逆行順行、天魔波旬も測難しと云ふ境界で學者を接得せられたのであるから、諸方の學者之を見て、廬山の胸中を推測する者もなく、悉く皆途轍を失つて茫然として居られたと云ふ。

**丹霞和尙**

鄧州丹霞天然禪師は、何の許の人と云ふことは分らないが、初め儒道を學んで、將に長安に入つて選官試驗の擧に應ぜんとして途中、逆旅に宿した、所が忽に白光室に滿つと夢みた、占者の曰く「解空の祥なり」と、偶、一禪客あり問ふて曰く「仁者何處にか往く」、曰く「選官し去る」、禪客曰く「選官何ぞ選佛に如かん」、霞曰く「選佛當に何の處にか往くべき」、禪客曰く「今江西に馬大師出世す是選佛の場なり仁者往くべし」と、遂に江西に造つて馬大師に見へた、馬師一見して曰く「吾汝が師に非ず南嶽石頭の處に去れ」と、遂に南嶽に抵つて還て前意を以て之に投じ、行者堂に入つて三年間衆に隨つて作務して居られた、石頭一日衆に告げて曰く「來日佛殿前の草を刈らん」と、來日に至つて大衆各鍬鋤を備へて草を刈る、丹霞獨り盆を以て水を盛り淨頭して師の前に於て胡跪した、石頭見て之を笑ひ、便ち與めに剃髮した、又爲めに戒を說くと、丹霞耳を掩ふて出て江西に往いて再び馬祖に謁した、未だ參禮せざるに、便ち僧堂の內に去つて聖僧の頸に騎つた、大衆之を見て驚愕して急に馬祖に報ずると、祖躬ら堂に入つて之を視て曰く「我子天然」と、霞便ち下つて禮拜して曰く「師の法號を賜ふを謝す」と、因て天然と名けられた、後に慧林寺に

於て天の寒きに値ひ、遂に殿中に於て木佛を燒いて尻を煖めたと云ふ名高い和尚である。此の丹霞の用處は、多く是の如く本分に安住して翫珠隱顯出沒自在である、故に諸方の學人が出て來るときは丹霞和尚に皆悉く罵倒せられた。

麻谷和尚

麻谷寶徹禪師は、馬祖の法嗣である。此の和尚の用處の如きは黃蘗を嚙むが如く、實に苦々しき心を以て平生學者を接得せらるゝが故に、諸方の學人皆近傍し得なかつた。

石鞏和尚

撫州石鞏の慧藏禪師は、本と弋獵を以て務と爲して沙門を見ることを好まなかつた。或時鹿を逐ふて馬祖の菴前を過ぎたとき祖乃ち之に逆ふと、師遂に問ふ「還つて鹿の過ぐるを見るや否や」と、祖曰く「汝は是何人ぞ」、曰く「獵者」、祖曰く「汝射を解すや否や」、曰く「射を解す」、祖曰く「汝一箭に幾箇をか射る」、曰く「一箇を射る」、祖曰く「汝射を解せず」、曰く「和尚射を解すや否や」、祖曰く「射を解す」、曰く「彼此生命なり何ぞ他の一群を射ることを用ひん」、祖曰く「汝既に是の如きことを知らば何ぞ自ら射ざる」、曰く「若し某甲をして射さしめば直に是手を下す處なけん」、祖曰く「這の漢曠劫の無明煩惱今日頓に息む」と、鞏遂に弓箭を擲下して祖に投じて出家せられた。此の石鞏和尚は、元と獵人で在つた故に、嗣法の後も一張の弓と、一雙の箭とを以て學人を接得せられた。學人が出て來れば弓を以て箭を架し之に示す、故に天下の學者皆恐怖して近傍する者がなかつた。

如山僧今日用處眞正成壞翫弄神變

山僧が今日の用處の如きは眞正成壞神變を翫弄し、一切萬境に入つて少も萬境に惑亂せらるゝことはない、隨處に境を用ひて無爲無事である。設ひ萬般の邪境が頭を競ふて出

で來ると雖も、決して其が爲めに轉換せられることはない。但諸方の學人出て來つて這箇を求むる者あれば、我即ち出て學者の具眼であるか不具眼であるかを看破すれど、學者は一向我を知らない。其故に我便ち言句葛藤の種々の衣を著けて這箇の事を漏逗すれば、學人根本の處に眼を著けずして却て邪解を生じ、我が言句を執著して離れない、實に苦々しいことである、瞎禿子、無眼の人。佛祖の妙道は言象の能く測る所ではない、然るに言象に依らなければ亦能く其の義理を說顯すことは出來ない。其故に佛四十九年の說法も已むことを得ずして一切衆生の爲めに橫說竪說せられたのである。今此の臨濟も亦萬已むことを得ずして言句葛藤の衣を著けて之に示せば、學人會せずして我が著くる底の衣を把へて青黃赤白と認め、知見解會を逞うするのである。

我言句葛藤の衣を脫却して淨躶々赤洒洒たる淸淨の境界を示せば、學人一見して便ち忻欲を生ず。我又此の淸淨衣を脫却すれば學人失心忙然として狂走して我に衣なしと云つて騷ぐのである。我即ち渠に向つて汝我が此の衣を著くる底の人を知るや否やと云へば、忽爾として頭を回して此の臨濟を認著するのである。諸大德、汝等此の衣を認著してはならない、衣は獨り動くとは出來ない、即今各著る所の衣も、衣の方から著られたいと云つて出て來たものではない、袈裟や、衣や、袷、綿入、單衣、帷子、羽織、袴も一々皆自己主人公の要求に應じて著用したるものである。さて衣と云つても種々の衣が有る、或は淸淨衣を著て一塵一法をも立せざる處に執著して居る者もあれば。或は無生衣を著て本分の田地に執著して居る者もある。或は菩提の大道を願ひ、涅槃妙心

大德但有聲名文句皆悉是衣變從臍輪氣海中鼓激成其句義

を求むる者もあれば。或は又成佛作祖を願つて佛惑祖惑を蒙つて居る者もある。諸大德、佛と云ひ祖と云ひ、菩提涅槃と云ふも、但是聲名文句のみで、實と認む可き者ではない。然らば此の聲名文句と云ふ者は、如何にして出來た者であるかと云へば、各方の臍輪氣海の中より鼓激(クヾキ)し、咽喉に觸れ舌に觸れ、齒に當り、唇に皷せられて、音聲と成り、言語と成り、種々の義理を說顯して句と成り、文と成つた者であつて、畢竟幻化で、實と認むべき者でないと云ふことは明に知れてある。諸大德、外には臍輪氣海の中より鼓激して出づる所の聲名文句の相を是と認めて種々の業を發し、內には一心が萬境に隨つて生ずる所の諸法を取つて自己の心性を表し、見惑思惑を起し、而して其の妄念を捨つることが出來ないで必ず有つて居る、是等は皆悉く衣である。然るに諸人、他著くる底

不如無事相逢不相識其語不知名

の衣を認めて實解とし、文字言句に窟托し、知見解會を逞うして空しく時光を送れば、縱ひ塵劫を經るとも決して眞正の見解を得ることは出來ない、得る所のものは唯是衣通である。衣通は生死岸頭に臨んで怙みにはならない、時節到來すれば盲者の杖を失へるが如く途方に暮れ、三界六道を汲井輪の轉するが如く循還し、生死の大海に出沒浮沈して、終に輪回の苦を免るゝことは出來ない。役にも立たぬ苦勞をするよりか兎角無事に如く者はない。無事是貴人である。此の無事の貴人は二六時中、行住坐臥、著衣喫飯、屙屎送尿の處、頭々物々の上に於て臂頭臂面に相逢ふと雖も、如何なる姿形であると云ふことも識らないが、亦共に月よ、花よと話はすれども、其の名は何んと云ふやら曾て聞いたこともない。今時の學人が此の無事底の人と成得ることの出來ないの

大策子上抄
死老漢語

は如何なる次第であるかと云へば、蓋し別の仔細ではない、只是名字言句を執著して知見解會を逞うするが故である。其の證據には、出る者も、入る者も、皆悉く大きな手帳を綴つて、其の上に諸方の惡知識共の嘔吐粕を認め、其を此の上もなく大切に、三重五重袱紗に包んで人にも見せないやうにし、諸佛の玄旨は此の中にあるなどと云つて秘藏して居る。是は大なる錯である。諸佛の玄旨は包まんとした所で包まれる者でもない、見性悟道の端的が即ち諸佛の玄旨である。瞎屢生、枯骨を絞つて如何程汁を覓めんとした所で、汁の得られる筈はない、文字の上に向つて如何に諸佛の玄旨を求めんとした所で、玄旨の得らるべき筈はない。又茲に一種の好惡を知らざる盲僧が在る。此の僧一向坐禪もせずして、只教文の中に向つて意度商量して、我禪を明め得たりなどゝ

如把屎塊子
向口裏含了
吐過與別人

云つて、終日教文の義理を說立てゝ居る。其は譬へて云つて見れば他人のひつたる屎塊子を口一杯に頰張て、其を再び吐出して別人に與へると同事である。尙又譬へて云つて見れば彼の奏者の役を務めて居る者や、玄關番をして居る者と同事である。奏者や、玄關番は、客人の來意を其儘主人に傳奏すればよい。教相家に限らず、禪僧でも、教の義理にばかり拘泥して教を講じ、說法する者は、生涯眞の佛法を會せずして佛の口眞似、鸚鵡說法をして果すのである。併し切めての事に正直にでもすればよいが、己が小智小見に任せて嘘言ばかり云ふに至つては實に言語同斷である。一人虛を傳ふれば萬人實と傳ふるのであるから大に謹まなければならん併し眞の佛法を會することなく佛祖の口眞似、鸚鵡說法をして而して云ふ「我は是出家である」と、他に佛法を問著せ

眼似漆笑口如匾擔

大德汝波々地往諸方覓什麼物

られて即ち口を閉ぢて一言も酬答することが出來ない。其の者の顏色を見れば眼は漆突の如く、白黑し、口は橈はみて匾擔の如く、ベッロをして居る、實に笑止千萬である。此の如きの流は彌勒の出世に出逢ふても、到底悟ることは出來ない、他方世界の地獄の底へ逐落され娑婆に於て噓を云ひたる其の報ひに、朝夕種々の責苦を受けねばならん。諸大德、汝等慌たしく諸方を遍歷して脚版を踏闊げ、而して什麼物を覓めんとするか、察する所、佛を求め、道を求め、法を求めんとするのであらうが、佛と云ひ、道と云ひ、法と云ふものは、求めて得られる者でない。如何となれば元來求む可き佛もなければ、成ず可き道もない、亦得るべき法もない。設ひ三十二相八十種好を具したる佛を求得たとした所で、本分の上より見れば大なる相違である。本源の自性が即ち天眞佛である。

非合非離

三法混融和合一處辨既不得喚作忙々業識衆生

設ひ如何なる相好を具するとも、相ある者は皆悉く眞佛ではない。諸人、人々具足の本心は、四大和合のときと雖も、和合する者でもなく、四大分離の時節と雖も離散する者でもない。然るに又此の四大を離れた者でもない、其の證據には茶に逢ふては茶を喫し、飯に逢ふては飯を喫する。亦合した者でもない、其の證據には火に入つても燒けず、水に入つても溺れない。道流、眞佛は無形、眞道は無體、眞法は無相である。此の眞佛、眞道、眞法の三法が時に混融して一處に和合する、其の和合する處を分明に辨別し識得することの出來ない者を喚んで忙々たる業識の衆生と云ふのである。

## 第十章　如何是眞佛眞法眞道

眞佛と云つて別に在るのではない、汝が一心淸淨にして

佛是法者明是道者是々
心清光處無礙淨光

一塵一法を立せざる處、是即ち眞佛である。眞法と云ふも別に仔細はない、汝が自己の靈光分明にして萬法を照破する底、是を眞法と云ふのである。眞道と云ふも亦別の義はない、汝が一心の清淨光盡十方に通貫し、四天下を照破して在々處々更に一物の障礙なき底、是を眞道と云ふのである。此の如く眞佛、眞法、眞道と區別して云ふときは三つの名はあれど、畢竟三即ち一に歸するのである。皆是本分より命じた所の空名で、而も實體有る者でない。眞正參玄の上士、鐵作の道人であれば、二六時中、行住坐臥、只這箇を受用し得て少も間斷はない。趙州和尚も「十二時中を使得」と云はれたが、什麼物が十二時中を使得るか、此の受用間斷なき底の人より外に十二時中を使得る底の者はない。眞實此の道に志あらん者は一念も雜用心してはならない。一念萬念で一度思ふたこ

自達磨大師從西土來祇是覓箇不受人惑底人

とは一期の間も忘れ難い者である。故に正念相續間斷なきやうに行つて行かなければならん。人惑を受くるのも畢竟自己の受用に間斷あるが爲めである、二六時中、純一無雜、打成一片でありさへすれば人惑を受くることは更にない。我が初祖達摩大師が西天より海に泛んで得々として來られたのも別の仔細あるのではない、只這箇心性を受用すること常に間斷なくして、人惑を受けざる底の大乘根器の人もあらば覓得て法を傳へたいと云ふばかりである。當時佛心天子と喚ばれたる梁の武帝に見えられて、二三問答を試みられたれども、武帝は其の器でなかつたのである。是に於て遂に楊子江を渡つて魏の國に到り、嵩山の小林寺で九年の間面壁して、大法器の人を覓められたが、曾て其の器に協ふ者がなかつた。後二祖慧可大師が之を聞いて、乃ち小林寺に

後過二祖一言便了始知從前虛用功夫

往つて晨夕參叩せられた。然るに達磨は學者をして自悟自得せしむるのを主とせられたのであるから、端坐面壁して一言も敎へると云ふ事をしなかつたのである。二祖自ら忖つて曰く「昔人道を求むるに骨を敲て髓を出し血を刺して飢を濟ひ髮を布いて泥を掩ひ崖に投じて虎を飼ふ古へ尙ほ此の如し我又何人ぞや」と、遂に死を決して道を求むるに至つた。時しも後魏の光明帝の太和十年十二月九日の夜のこと、雪は深々と降り積もる、寒氣凜冽骨髓に徹すると云ふ折柄、砌下に立つて頑として動かなかつた、明る遲ひ積雪膝を過ぐるに至つた。流石の達磨大師も此の有樣を見て之は眞實道を求むる者であると云ふことを憫まれて、始て聲をかけ「汝は何の求むべき事ありて雪の中に立つて居るのであるか」と問はれた。二祖は此の時眞心を込めて「唯願くば慈悲甘露門を開きて廣く群品を度したまへ」と、云はれたが達磨は更に勵まして曰く「諸佛の妙道は曠劫に精勤して行じ難きを能く行じ忍び難きを能く忍ぶ豈に小德小智輕心慢心を以て眞乘を冀はんと欲すとも是の處りあることなけん」と。二祖誨勵を聞きて道に向ふこと益切となり潛に携ふる所の利刀を取つて、自ら左の臂を斷ちて達磨の面前に致き、身命を惜まず法を求むることを表明せられた。達磨是法器なることを知つて遂に問ふて曰く「汝雪に立つて臂を斷ち當に何事の爲めにかすべき」と、二祖曰く「某甲心未だ安からず乞ふ師安心したまへ」、達磨曰く「心を將ち來れ汝が爲めに安ぜん」と、二祖曰く「心を求むるに了に不可得なり」、達磨曰く「我汝が爲めに安心し竟んぬ」と、言はれた一言下に於て二祖は忽然として大悟して、始て從前虛しく功夫を用ひて居た

第一句
第二句
第三句

と云ふことを知られた。達磨は此の如き大丈夫の大法器の人に遇ふて大法を付囑せられた。兎に角禪門の急務は見性が第一である。各自己の心性を識得するには功夫を用ひるの、用ひぬのと云ふ沙汰には及ばない、直指人心見性成佛である。山僧が今日の見處は釋迦、達磨と少しも違つた事はない。若し第一句の中に於て會得するならば、第一句は超佛越祖の談であるからして佛祖の爲めに師範となることが出來る。若し第二句の中に於て會得するならば、三界の大導師となることが出來る。若し第三句の中に於て會得する者は人を救ふことは勿論のこと、自己を救ふことも出來ない。此の三句は各骨折つて參得するがよい。

## 第十一章　如何是西來意

有意自救不了

達磨西來畢竟無意である、若し意あらば他人を濟度することは勿論のこと、自己を救ふことも出來ないであらう。

得者是不得

云く既に西來に意なしとしたならば得法と云ふこともない筈である然るに二祖は達磨より法を得られしと云ふ如何なる次第にてあるや

咄哉丈夫將頭覓頭

云く二祖が法を得ない處が法を得た處である、若し法を得たと云ふ者が在つたなら、其の人は眞に法を得て居る者ではない。

云く既に若し不得ならば其の不得底の意如何

云く汝が不得底の意と問ふ既に其が馳求の心である、其の馳求の心を歇得することを能はずして外に向つて求めば、生涯大休歇の田地に到ることは出來ない。其故に祖師も汝等が如く馳求する者を罵つて「咄哉大丈夫頭を將て頭を覓む」

山僧今時事不獲已話度說出許多不才淨

と云はれた。元來自己屋裏に在る者を外に向つて求むるは彼の演若達多が失ひもしない頭を失つたと云つて狂氣の如く尋廻りたると同事で、實に愚の至りである。寔に大丈夫たる者の耻つべき事である。諸人、此の方の一言下に於て一疑念を挾まず、便ち自ら回光返照して外に求めず、身心と祖佛と別ならざることを知つたなら、其の端的が即ち無事安穩の田地である。其の無事の田地に安住して諸の惑を受けざる處を名けて得法と云ふのである。諸大德、今此の方が萬已むことを得ず狂げて人情に順つて、意あらば自救不了ぢやの、得と云ふは是不得なりなど、許多の言句葛藤の不才淨を口に任せて說出したのであるが、諸人、錯て之を是と認めてはならない、一々皆筋ない何の役にも立たぬ事である。我が見處に據らば、一言半句たりと雖も說くべき道理はない。

莊嚴門佛事門

斯く此の方が云ふばかりでなく、佛も一代四十九年の間、頓漸秘密、不定半滿と橫說竪說せられて於て、終に一字不說と云はれた。祖師一千七百則の公案も畢竟是閑葛藤。諸人、今此の臨濟が言ふ所を信じて、用ひんと要せば便ち用ひよ、信ぜざれば已むを得ない、口を閉ぢて休する迄のことである。

今時諸方に六度萬行を說いて之が眞の佛法である、之を修すれば成佛疑ひないなどゝ云つて居らるゝが、是莊嚴門、佛事門で、眞實の佛法ではない。只之は人天の小果、有漏の因となる迄である。よし持齋持戒堅固に油を擎げて潤さゞる程嚴重に戒律を持ちても、道眼明かならざれば皆徒勞に歸する。故に其の徒に飯を喫して時光を送りたるのが悉く宿債と成つて、閻王の前に於て生存中の打飯錢を索はるゝ日が必ず來るのである。其れは如何なる仔細であるかと云へ

入道不通理
復身還信施

ば、古にも斯かる例がある、今其の一例を擧ぐれば、「入道不通理復身還信施」長者八十一其樹不生耳」と云ふ偈がある。此の偈は第十五祖迦那提婆尊者の偈であるが、尊者は南天竺の人で、師が得法の後毘羅國に至ると、彼處に梵摩淨德と云ふ長者が在つた、一日園樹に大なる耳が生じて、菌の如く味が甚だ美な、唯長者と第二子羅睺羅と二人が取つて之を食するのである、取已めば隨つて長じ、盡きては復た生ずる、其の餘の親屬には一切其が見えない、時に尊者聞いて其の宿因なることを知り、遂に其の家に至ると、長者が其の故を問はれた、尊者曰く「汝が家昔曾て一比丘を供養したことがある然るに此の比丘が道眼未だ明かならず虛りに信施に霑ひし故を以つて其の恩に報ひんが爲めに木菌と爲りて長者の家に生じ今其の信施を還へす所である唯汝と汝が子と

孤客獨宿一
食仰齋

精誠に供養したのであるから其の報を享くることを得るが餘の者は則ち享くることは出來ない併し長者汝が年幾歲にてあるや、曰く「七十有九」、尊者曰く「汝が年八十一歲と成れば其の樹耳を生ずることはあるまい如何となれば彼の比丘信施を還へし盡して大休歇を得るが故に」と云つて右の偈を說かれたのである。信施を受けて仇や疎に思ふたなら、牛や、馬と成つても信施を還へさなければならない。乃至深山幽谷に入つて樹下石上に獨宿し、或は日中一食したり、或は長坐蒲團脇席に著くることなく、或は二六時中念佛誦經して佛道修行するも、道眼明かならざれば皆是地獄の業を造る底の人である。或は又法の爲めには軀命をも顧みず、財寶も惜まず、頭目、髓腦、國城、妻子、象馬、七珍等も悉く捨施するなどは寔に奇特な行ひではあれど、是等の如き見識は皆是

不如無事純一無雜

身心を苦ましむるが故に、還て苦果を招くのである。道眼明かならざれば何事をしても皆是有漏の因となる。或僧古德に問ふ「出家の苦如何ん」、古德曰く「出家の苦は不明眼是苦也」と、今生に一たび悟らずんば生々世々輪回の苦を離るゝことは出來ない。設ひ一端果報を受くるとも、箭の勢盡きて落つるが如く、修行の力盡くれば再び不如意を招くは疑ひないのである。無益な造作をして苦果を招かんよりは、但無爲無事にして純一無雜打成一片に成つて居た方が遙に勝つて居る。十地滿心の菩薩を始めとして何れも皆此の純一無雜底の道人の蹤跡を尋求むれども、空劫已前より直に今日に至る迄了に得ることは出來ない、所以に諸天地神は勿論のこと、三世十方の諸佛、諸菩薩に至るまで、此の沒蹤跡の道人を圍繞して歡喜稱歎せぬ者はない。何に緣てか此の如く

緣何如此爲今聽法道人用處無蹤跡

なるかと云へば、即今目前聽法底の道人、日用應緣の處、蹤跡なきが爲めの故である。此の沒蹤跡の道人は人々具足箇々圓成にして、而も能く萬象の主宰となる者である。此の者を能く悟得て受用すれば護法善神も必ず守護するのである。護法善神と云つて外に在る者ではない、皆自己屋裏に鎭坐して居る。守護するのは沒蹤跡と知りたる處が護法善神の我と我が身を能く守護する處である。十方諸佛と云ふも皆同じこと自己屋裏に在つて手を把つて共に行き、脚を交へて共に坐して居る。故に古人は「諸佛心頭に在り」とも云つて居る。又「天地と同根、萬物と一體」とも云つて居る。三世の諸佛、歷代の祖師も、諸天諸神も、一々皆此の沒蹤跡の中より出て、復た沒蹤跡の中に歸する、是程世に尊き者はない。故に釋迦は天上天下唯我獨尊と仰せられた「上無攀緣下絕己躬」底の

眞正の道人である。畢竟如何「兎角龜毛過別山」

## 第十二章　大通智勝佛

大通智勝佛

問ふ大通智勝佛十劫坐道場佛法不現前不得成佛道と未審し此の意如何

大通と云つて別の者ではない、人々具足の自己、竪に三際を窮め、横に十方を該ね、在々處々に應現して萬法は本來無性無相なる者であると云ふの理に通達する、是を名けて大通と云つたものである。智勝と云ふは、一切處々、頭々物々の上に於て神通妙用を現はすもの、只是自己と用ひて一塵一法を立せざる、是を名けて智勝と云つたものである。佛と云ふも別に外にあるではない、人々具足の此の一心は元來無垢清淨にして、而も其の光明上は霄漢に透り、下は黃泉に徹し、明々歷々として照さぬ處はない、是を名けて佛と云つたものである。十劫坐道場と云へば、程遠きことのやうに思ふのであらうが、之は施、戒、忍、進、定、般若、方便、願、智、力の十波羅密、之を指して十劫坐道場と云つたものである。佛法不現前と云ふも別に不思議なこともない、眞佛眞法の上には、生すると云ふことも、滅すると云ふこともない、畢竟不生不滅である、更に什麼物があつて現前するのであらうか、現前すべき者のあるべき筈はない、故に不現前と云つた者である。不得成佛道と云ふも何の疑もない事である、即心即佛で、自己元來佛である、此の上更に作佛と云ふ道理のあるべき筈がない、故に不得成佛道と云つたものである。古人は「佛常に世間に在まして而も世間の法に染まず」と云はれて居るが、其の如く佛は十方法界に徧滿して、一切世間都にも鄙にも滿々

十劫坐道場

佛法不現前

不得成佛道

欲得作佛莫隨萬物

ちて居る、而も其の世間の法に染まざること蓮花の淤泥の中に在つて淤泥に染まざるが如くである。

道流、汝今此の世間に在まして、而も世間の法に染まざる底の眞箇の佛に成得て見たいと思ふならば、其は何より最易い、但萬境に此の心を轉ぜられないやうにする迄でのことである。如何にすれば萬境の爲めに轉ぜられないやうに出來るかと云へば、人々所持の吹毛劍を以て萬境を一々截斷する、其の截斷し盡した端的が即ち眞佛である。强ち截斷せなくとも、頭々顯露、物々全眞と用ひるがよい。然るに一心が萬境に隨つて生ずる故に、念々相續して是非善惡等の種々の煩惱妄想が起るのである。煩惱妄想決して他より生ずる者ではない、故に心滅すれば種々の煩惱妄想皆悉く消滅するのである。又設ひ煩惱妄想が起つたからと云つて、其の

一心不生萬法無咎

世與出世無佛無法

罪決して萬法にある筈はない。一切萬法は元と不生の生にて、一心と云ひ、萬法と云ふ差別はない、柳は綠に、花は紅なりと雖も、柳自ら我は綠であると云ひ、もしない、花自ら我は紅であると名乘て出もしない、綠と云ひ、紅と云ふも、皆是人間が勝手に付けた名である。一切萬法皆是の如く萬法自身に是非善惡あるではない。六凡と云ひ、四聖と云ひ、世法と云ひ、佛法と云ふも、皆是一心より生じた者であつて、畢竟無佛無法である。無佛無法であるが故に佛も法も現前すべき者はない。現前すべき者がないから亦失つたと云ふこともない。失つたと云ふことがないから勿論得ると云ふこともない。設ひ世出世の二法、得失是非の說が有るは有るとした所で、皆是名字言句等の沙汰のみである。決して實法と認むべき者ではない。彼の黃葉を揚げて黃金と云ひ、空拳を握つて饅

接引小兒施設藥病表顯名句

安一切名句

頭と云つて小兒の啼を止むるのと同事である。佛四十九年の間横説竪説せられたのは、一切衆生の病人に對して藥の效能を説立てたのである。一代藏經は即ち其の效能書である。如何程其の效能書を讀んで見た所で病に何等の效驗はない。さらばと云つて能書を煎じて服する譯にも行かない。其の如く一代藏經を如何程詮索した所で、佛の心裏に徹底することは出來ない。若し表顯の名字言句が實なる者であれば、名字言句自ら我は是佛である、祖師であると云つて名乘つて出づべき筈であれど、元より不實な者であるが故に、未だ曾て名乘つて出たこともない。還て是汝が目前照々靈々として天を照し、地を鑑み、萬法を照燭して聞見覺知する底の這箇より山河大地、草芥人畜、及び天堂地獄一切の物に名を命じた者である。諸大德、此の一切の名句を安著する底の者を識得せんと欲せば、五無間業を造つて方に始て解脫の大海に入得することが出來るのである。

殺父害母出佛身血破和合僧焚燒經像

如何是父

## 第十三章　如何是五無間業

五無間業と云ふは父を殺し、母を害し、佛身血を出し、和合僧を破り、經像等を焚燒する、此の五逆の罪を犯したる者が墮落する所の地獄、是を五無間と云ふのである。何故に無間と云ふかとなれば、間斷なく呵責の苦痛を受くるが故である。

云く如何なるか是父

云く父と云ふは別の仔細でもない、無明を指して父と云ふのである。根本の上には無明煩惱と云ふやうなものはないが、汝が一念心の生ずるに隨つて無明煩惱の起滅がある、然

し其の起滅の處を求むるに響の空に應ずるが如くにして更に蹤跡はない、其の沒蹤跡の處を能く受用し得れば觸處現成で、何處も彼處も無事と成る、是を名けて父を殺すと云ふのである。

如何是母

云く如何なるか是母

云く母と云ふも別の事ではない、人々貪愛の中より生死に出入するに依て貪愛を名づけて母と云ふのである。然るに其の貪愛の心は何れの處より起るかと云へば、汝が一念心欲界の中に入つて其の貪愛を尋求むれども更に其の起滅もない、唯諸法の空相を見るのみである。其の諸法空相と見る者は如何なる者であるかと云へば、日々夜々一切處々に緣じて、而も能く其の處に著することもない、此の空相の理を分明に識得して貪愛を截斷ずる、其處を名けて母を害すと云ふのである。

如何是出佛身血

云く如何なるか是出佛身血

云く出佛身血と云ふも別の仔細はない、汝等諸人、自己屋裏の清淨法界の中に向つて一念心の邪解を生ずるなく、佛見法見共に打つて除けて、一切處々本分現成して無爲安泰なる處、是を出佛身血と云ふのである。

如何是破和合僧

云く如何なるか是破和合僧

云く破和合僧と云ふも別の事でもない、只汝が一念心の上に於て煩惱結使の起る處の根源に達して見れば更に一塵一法の心頭に懸る者はない、空々寂々として虛空の蹤迹なきが如くである、其の蹤迹ない處よりして無明煩惱元來是虛空の所依なきが如くなる者であると見る、是を破和合僧と云ふのである。

如何是焚燒經像

向空拳指上生實解根境法中虛揑怪

云く如何なるか是焚燒經像

云く焚燒經像と云つて別に仔細もない、根本の上には因緣と說き、心と說き、又法と說くべきことはないと、總て空じ去つて一念心の疑もなく、萬事決定して物と拘らず迥然獨脫にして無爲無事なるを、便ち焚燒經像と云ふのである。

諸大德、各若し能く如上の理に達し得たならば、佛ぢやの、衆生ぢやの、凡ぢやの、聖ぢやのと云ふ名の爲めに障礙せらるゝ事はないのであらう。如來の五千四十餘卷の敎文も、祖師一千七百則の公案も月を標す指、小兒の啼を止むる空拳と同事である。然るに諸人、只其の空拳指上に向つて實有の見を生じ種々の分別を爲すは、彼の小兒が己れの啼を止めんが爲めに提起したる空拳を認めて、其の中に實際饅頭有りとの念を生じ、又無智なる者が指を執して月と爲すと一

我是凡夫他是聖人

大丈夫漢不

般である。又眼耳鼻舌身意の六根も、色聲香味觸法の六塵も、亦此の間に生ずる種々の法も、皆是寂滅の相にして畢竟蹤迹はない。其の蹤迹ない者を妄執して、六根ぢやの、六塵ぢやの、法ぢやの、何にぢや、乎ぢやと云つて日も尙足らずと云ふ有樣で、其が爲めに惑亂せられ、勇猛の精進決定の志は退屈して、果ては我と我が身を賤みて、我は是凡夫である、他は是聖人である、我等如きの到底企及す可からざる所であるなどゝ云ふて、一生を空しく果すのである。實に不甲斐ない話である。禿屢生、えい年を暴して、頭の禿げた形をして、追付くたばるのは知れてある、すは臨終と云ふ其の場合に出身の一路ありや。獅子の皮を被して、卻て狐の吠ゆるが如く、身は大丈夫の漢でありながら、丈夫の氣慨がないは。孔門の亞聖顏回は「舜何人ぞ我何人ぞ」と云つたでないか、況や佛弟子た

作丈夫氣息

る者に於てをやだ。眞佛眞法遠方にてもあることか、自家屋裏に當處を離れず常に湛然として在る。然るに諸人、之を信ぜずして却て之を外に覓め、古人の文字言句の上に向つて、恰も陰陽師の占を爲すが如く、知見解會を逞うするが故に、生涯獨脫無依の道人と成ることは出來ないで、萬境に對しては便ち種々の煩惱妄想を起し、觸る處に隨つて惑が起つて自ら止處がない。道流、山僧斯の如くに說くと雖も、決して此の說處に執著してはならん。何んが故であるか、說に據處はない、彼の華嚴經に說かれてある工畫師の喩の如く、一期の間、只白紙に佛祖の像などを畫きて、種々の彩色を施したも同事である。道流、佛は究竟で殊勝な者であると思つてはならない、此の方の眼より見るときは、佛は雪隱の墮落壺の如き穢き者である。菩薩ぢやの、羅漢ぢやのと云ふ者は、盡く

文殊仗劍殺於留曇鴦掘持刀害於釋氏

皆是相似表

人を繫縛する底の者である。所以に文殊は劍を執て留曇を殺さんとし、鴦掘は刀を持して釋氏を害せんとせられたこともある。若し心外に法を見て分別の念を生ぜば、直饒ひ廣く勝妙の事を爲すと雖も決して究竟ではない。道流、眞佛に形はない、眞法に體はない、故に得やうとして得らるゝ者でない。又三乘と云ひ、五性と云ひ、圓頓と云ふが如き敎迹は、皆是佛一代四十九年の間衆生の病に應じて與へられた藥で有つて、衆生の病が癒えたなら藥に用事はない、病も藥も二つながら治まりて無爲無事の道人と成得て見れば、根本の上には迷と云ふことも、悟と云ふことも、說法と云ふことも、聽法と云ふことも、一々皆是筋ないことで、眞實の法ではないと云ふことが明かに分かる。設ひ三乘、五性、圓頓等の敎迹有るは有るとした所で、皆是這箇の道理を說顯さんが爲め

顯路布文字差排

大德莫錯我且不取汝解經論

の表相である。又彼の路布の文字を程よく排列したのと同事である。今此の方が是の如く眞佛眞法外に無いと說けば、道流、彼の物の道理の分らぬ者は、便ち又內に向つて工夫を著けて出世の法を求めんとするのであらうが、是亦大なる錯である。若し人佛を求むれば是の人は既に佛を取失つて居る。若し人道を求むれば、是の人は既に道を取失つて居る。若し人祖を求むれば、是の人は既に祖を取失つて居る。諸大德、取違をしてならない、我且汝が經論を解することが出來たからと云つても取らない、我亦汝が國王大臣であると云つても取らない、我亦汝が懸河の如き辯が有ると云つても取らない、我亦汝が聰明にして且智慧が有ると云つても取らない、要する所の者は唯汝が眞正の見解である。道流、設ひ千經萬論を解し得るとも、眞正の見解を得ざれば何の役に

如善星比丘解十二分敎生身陷地獄

も立たない。其よりか一箇無事底の道人が遙に勝つて居る。法華經にも「憍慢の心を破して法を說くに障礙なからしめよ」と說かれてあるが、諸人、眞正の見解を得ないで、我こそ當代の學者であると云はぬばかりに、慢りに人に對して經論を講釋するのは、所謂戲論である。則ち他人を輕蔑するのみならず、勝負の修羅、人我の無明、地獄の業を增長するのみである。彼の善星比丘の如きは十二分敎を解し得て居たなれど、生身に地獄に陷落したと云ふが、憍慢の心を以て經論を講釋するような者は、大地も容れては吳れない。其のやうな造作をして地獄に墮落するよりか、無事にして休し去り、歇し去るに如くはない、飢來れば飯を喫し、睡來れば眼を合す、愚人は我を笑うであらうが、儘よ智者は乃ち箇の中の消息を知つて居る。道流、上にも段々說く如く文字の中に向つて

大德莫因循過日

眞佛眞法を求めた所で得らるゝ者でない、心動すれば徒に疲勞を來すのみである。役にも立たぬ事を喋て、あつたら口に風を引かせるより一念起れば萬緣と起るが、畢竟是無生なる者であると悟りて、三界權學の菩薩を超出するのが遙に勝て居る。諸大德、因循として日を送つてはならない。山僧も往日未だ見處あらざりしときは大地黑漫々たる境界で在つたのである、併し光陰を空しく過してはならないと思つて決烈勇猛の大憤志を發しては見たものゝ、胸中未だ平穩ならず訪道參禪の爲めに江湖を遍歷した、所が後に黃檗禪師の六十棒を喫して還て大に力を得て、今日に至つて始て道流と共に是の如く話度することが出來るやうに成つたのである。偏に諸方の學者に勸めるが、決して衣食の爲めに參禪辨道をしてはならない。衣食の事は左程に心配すべ

看世界易過
善知識難遇
如優曇華時
一現耳

我向伊道龍
象蹴踏
所堪非驢

き者ではない。諸人看よ、此の廣い世界で飢て死んだと云ふ人も、凍えて死んだと云ふ人も實に稀である、兎に角此の世界は、どうなり、こうなり過して行ける者である。併し善知識には遇難い、優曇華の時に一度現するが如くである。汝等諸人、諸方の學者が此の臨濟老漢ありと云ふことを聞いて出て來て、難問を持掛て遣込めて吳やうとして、却て山僧に全體作用せられて學人空しく眼を開き得て、口總に動くことを得ず、懵然として何を以て我に答へんと云ふことを知らない。我彼に向つて云ふ龍象の蹴踏は驢の堪ふる所にあらずと。諸人、諸方の惡知識の下で皆見切賣の安物を買つて、我禪を解し、道を解すと云つて居れど、三箇兩箇這裡に到て、此の臨濟を奈何ともすることが出來ない。這箇の身心を以て到る處に上下の唇を鍍し、田舍の善男善女を誑かして、得た

夫如至理之道非諍論而求激揚鏗鏘以摧外道

り賢しと思つて居れば、今に閻魔大王の前に於て鐵棒を喫するのは知れて居る。此の如き族は假令圓頂黑衣の徒と雖も、眞の佛弟子とは云へない、のみならず此の娑婆世界に於て接得するのは分に過ぎて居る故、盡く阿修羅界に向つて接得せなければならん。

夫れ極妙究玄の至道の端的に至つては猥りに諍論して憤激し、金切聲を張上げて異見邪解の徒を摧くばかりが能ではない。佛祖の相承に至つては更に別意はない、不立文字教外別傳の宗旨を單傳するのみである。設ひ若干の言教あるとした所が、皆是下化衆生の方便で有つて、三乘、五性、人天の因果に外ならない。華嚴ぢやの、法華ぢやのと云ふ圓頓の教の如きも、又且つ此の別傳の宗旨には協はない。彼の善財童子は南方に往いて一百十城を經歷し、五十三の善知識に

日上無雲麗天普照

一々參得すと雖も、此の教外別傳の宗旨に至ては未だ悉く透過は出來ない。諸大德、錯つて用心してはならない。畢竟文字言句に用事はない。大海に死屍を停めざるが如く、胸中一物たりとも留むる物が有つてはならない。若し兎の毛たりとも何にか殘つて居たなら其が殃の本となる。然るに祇管に文字言句の死屍を擔いて天下に馳廻らんとするのは、自ら見惑を起して自の本心を礙へたのと同事である。「總爲浮雲能蔽日長安不見使人愁」、日上に雲なければ日は碧空に在つて麗に普く照して居る。「雲はれて後の光と思ふなよ本より空に有明の月」。元來空中に花などの在るべき筈はないなれど、病が眼にあるに由て亂華叢然たるが如くである。眼中に翳なければ空裡に花はない。道流、汝等眞正の見解を得んと欲せば但疑を生じてはならない、人々具足の那一物は實

展則彌綸法界收則絲髮不立

に自由自在な者で、展ふるときは則ち十方法界に彌綸し、收むるときは絲髮も立せず、歷々孤明にして行住坐臥、著衣喫飯の上に於て未だ曾て少しも事を缺かない。して見れば眼にも見え、耳にも聞えるかと云へば、眼に見ることも出來なければ、耳に聞くことも出來ない、相逢ふて相識らず、共に語て名を知らず、喚んで什麼物としたならよいか。古人云く「說似一物則不中」と。汝等諸人、但自己に返照して看よ、更に什麼物があるか。說いて彌勒の出世に至るとも亦說盡すことは出來ない、各自に骨折て知るのが肝要である、珍重。

禪の眞髓 終


禪の眞髓

不許複製

明治四十五年四月二十日印刷
明治四十五年四月廿五日發行

正價九拾錢

著者　岡本通

發行者　福岡新三

印刷者　石川金太郎

印刷所　株式會社秀英舍

發行所　東京市神田區表神保町二番地　大成社

發賣所　東京市神田區表神保町　振替東京一九〇四四番　福岡書店

大賣捌　東京兩國柳橋　振替東京一九〇六五番　岡村書店

324
287

324
2857

324
287

019637−000−1

324−287

禅の真髄

岡本　通／著

M45. 4

ABG−0417